

令和 7 年度

香川県議会 ブラジル訪問

報告書

令和 7 年 8 月 2 7 日～9 月 4 日

ブラジル連邦共和国

1 訪問目的

北伯香川県人会及びブラジル香川県人会からの案内に応じて、「北伯香川県人会創立50周年記念式典」及び「ブラジル香川県人会創立70周年記念式典」に出席して祝意を表するとともに、移住された方々の労苦を労い、移住者や県人会との友好親善関係の強化と交流促進を図るものである。

あわせて、県内の経済界とともに現地の日本語学校や商工会議所等を訪問し、本県とブラジルとの経済交流を深める。

2 訪問場所

ブラジル連邦共和国（ベレン、サンパウロ）

3 訪問期間

令和7年8月27日(水)から9月4日(木)までの9日間

4 訪問者

派遣議員

議 長	谷久	浩一
議 員	宮本	欣貞
議 員	松原	哲也
議 員	森	裕行
議 員	白川	和幸
議 員	植條	敬介
議 員	川池	秀文

同行者

副知事 大山 智
一般社団法人香川県専修学校各種学校連合会
会 長 大平 康喜、事務局員1名
随行職員 議会事務局2名、国際課2名

5 日 程

	月 日	地 名	時間	内 容
1	8月27日 (水)	香川県 羽田空港 ドイツ フランクフルト	7:05 8:25 12:15 19:41 22:05	高松空港 発 羽田空港 着 羽田空港 発 フランクフルト国際空港 着 フランクフルト国際空港 発 【機中 泊】
2	8月28日 (木)	ブラジル サンパウロ ベレン	4:50 7:55 11:35	グアルーリョス国際空港 着 グアルーリョス国際空港 発 ヴァウ・デ・カンス国際空港 着 【ベレン 泊】
3	8月29日 (金)	ブラジル ベレン	11:15 13:30 14:30 15:10 15:45 19:30	北伯香川県人会会員の企業訪問 在ベレン領事事務所訪問 汎アマゾン日伯協会訪問 パラー日系商工会議所訪問 越知日伯学園訪問 北伯香川県人会歓迎夕食会 【ベレン 泊】
4	8月30日 (土)	ブラジル ベレン サンパウロ	10:00 17:15 20:55	北伯香川県人会創立50周年記念式典 北伯香川県人会創立50周年記念祝賀会 ヴァウ・デ・カンス国際空港 発 グアルーリョス国際空港 着 【サンパウロ 泊】
5	8月31日 (日)	ブラジル サンパウロ	10:30	ブラジル香川県人会創立70周年記念式典 ブラジル香川県人会創立70周年記念祝賀会 【サンパウロ 泊】
6	9月1日 (月)	ブラジル サンパウロ	9:00 10:30 14:00 15:30 18:00	ブラジル日本移民開拓先没者慰霊碑献花・参拝 ブラジル日本商工会議所訪問 在サンパウロ日本国総領事館訪問 アリアンサ文化センター訪問 ブラジル香川県人会歓迎夕食会 【サンパウロ 泊】
7	9月2日 (火)	ブラジル サンパウロ	8:45 11:00 11:50 18:15	JETROサンパウロ事務所訪問 エンブー市役所訪問 エンブー商工会訪問 グアルーリョス国際空港 発 【機中 泊】
8	9月3日 (水)	ドイツ フランクフルト	10:50 13:55	フランクフルト国際空港 着 フランクフルト国際空港 発 【機中 泊】
9	9月4日 (木)	羽田空港 香川県	9:45 13:20 14:35	羽田空港 着 羽田空港 発 高松空港 着

6 行事及び訪問の実施状況 (※ 各議員から提出のあった原稿をとりまとめたものです)

(1) 北伯香川県人会会員の企業訪問

令和7年8月29日(金) 11:15~13:15

同行者：北伯香川県人会会長 稲垣 山本 ルシア てい子 氏

北伯香川県人会副会長 大西 康宏 氏

概要：

Patio Belem Mallは、30年以上の歴史を持つ大型ショッピングモールであり、ベレン市中心部に位置し、1日に約4万人の利用者が訪れる主要なショッピングセンターの一つである。日系企業のDAISOも出店しており、日本文化や商品が現地社会に根付いていることを示す象徴的な存在となっている。

同モールには、ファッション、飲食、サービス、エンターテインメントなど多様なテナントが揃い、地域住民の生活拠点として重要な役割を果たしている。客層の多くが10~20代の若者であり、ファッション雑貨の店舗が多い。また、地域社会との連携や環境配慮の取り組み、雇用創出など、社会的責任を重視した運営が行われている点も特徴である。

このモールには、稲垣会長が洋装店とフランチャイズの権利を有するDAISOを出店しているが、会長によると、自身が入植したのはここから100kmくらい離れたトメアスであり、そこを出発点として、ブラジル北部の各地で工夫しながら長年商売を続け、この土地に店舗を構えて今に至るとのことであった。

洋装店では、地域住民の意向を踏まえた、地域社会と連携した営業を運営方針としており、店内は大変盛況であった。日系人がブラジル社会に根付く一面を見たようである。また、DAISOでは、日本の食品加工会社で作られたお菓子や加工食品が並んでおり、日用雑貨は中国製が多かった。これはDAISOのサプライチェーンがしっかりとブラジル全域に行きわたっていることの証左であり、強さの秘訣であると感じた。価格はいわゆる単一価格ではなく、品物に応じた価格設定となっている。また、客層は日系人だけではなく幅広い客層であった。日本のお菓子は現地でも大変な人気ようで、レジの前にはひと際多くの商品が陳列されていた。

後日訪問したJETROサンパウロ事務所でも、日本からの出店・進出にはブラジル現地のパートナー企業との合弁が重要かつスムーズであるとの話があり、今後日本企業進出の際には現地の日系企業との合弁が非常に有効であると認識した。



稲垣会長のテナントを視察



記念撮影

(2) 在ベレン領事事務所訪問

令和7年8月29日(金) 13:30~14:25

応対者：所長 坂本 登三雄 氏

同行者：北伯香川県人会会長 稲垣 山本 ルシア てい子 氏

北伯香川県人会副会長 大西 康宏 氏

概 要：

ベレン市は、ブラジル北部パラ州の州都であり、アマゾン河口近くに位置する人口約149万人の大都市である。ゴム産業の発展により19世紀から20世紀初頭にかけて急速に発展し、現在は、商業等の栄える高層ビルが林立する大都市となっており、鉱業（鉄鉱石、ボーキサイト、銅等）、農業（パーム椰子、大豆、熱帯果樹等）、港湾や水力発電所などの大規模インフラ整備事業などの前進基地としても機能している。

在ベレン領事事務所は、ベレン市を中心としたブラジル北部地域における日本国民の保護や支援、日伯間の交流促進を目的として設置され、在留邦人や短期滞在者への各種証明書発給、旅券発行、生活相談、緊急時の支援などの領事業務に加え、現地の日本人会や日系団体との連携、文化交流イベントの実施や情報発信などを行っている。

日系人のブラジル北部における最初の入植地はパラ州トメアスであり、当初黒胡椒やカカオの栽培を試みたが病虫害の発生などで苦しみ、日系人の多くがベレン市に移り住んだそうである。様々なご労苦を重ねた先人はその勤勉さと研究により、現在の繁栄を築きブラジル北部最大の日系人社会を形成するに至ったとのことである。領事事務所によると、日系人社会はベレンの地域の皆さんに非常に感謝されているとのことであった。特に、伝統文化や交流イベントなど、日本文化はパラ州の文化振興に大きく貢献できているようである。

そうした背景もあり、領事事務所はベレンをはじめとするアマゾン地域への日本からの投資、ビジネス展開のサポートの他、日本文化の普及啓発などの教育活動の促進にも努めており、北部日系人の拠り所となっている。県人会稲垣会長との連携も良好であり、日本人・日系人コミュニティとの懸け橋となっている。



意見交換の様子



記念撮影

(3) 汎アマゾン日伯協会訪問

令和7年8月29日(金) 14:30～14:55

応対者：会長 堤 剛太 氏

同行者：北伯香川県人会会長 稲垣 山本 ルシア てい子 氏

北伯香川県人会副会長 大西 康宏 氏

概 要：

汎アマゾン日伯協会は、日本文化の継承・普及、現地社会との交流、会員の親睦等を目的とする文化団体で、香川県出身者を含む多くの日本人移民の歴史と伝統を受け継いでおり、文化・教育・福祉など幅広い活動を展開している。

また、同協会は、日本語教育の普及、伝統行事や交流イベントの開催、福祉活動、青少年育成など、多岐にわたる事業を展開しており、現地社会と連携しながら、日系人のアイデンティティの継承や、地域社会への貢献にも力を入れている。

堤会長から、ご挨拶の中で、香川県の県人会は、日本全国の県人会の中で最も活発に活動をされており、母県香川県との交流も盛んで羨ましいとの話があった。

戦前は計画移住が行われていたが、戦後の日本は戦争から帰ってきた日本人を食べさせるだけの経済力がなかったために、増えた人口を急遽外国に送り出す政策がとられ、この地には計画なしで送り出された人も多かった。原始林の中、邦人保護のため汎アマゾン日伯協会は発足したとのことである。協会の活動は、設立時の邦人保護の団体から時代と共に変化し、現在は日本文化の発信などに積極的に取り組んでいる。その背景には3世以降の世代がブラジル社会に溶け込み、日本人としてのルーツは認識しつつも、文化や歴史について忘れ去られようとしている危機感があるものと思われる。

しかしながら、香川県を除く他県はだんだんと交流の機会を減らしており、香川県の交流支援事業を羨ましく感じるのも仕方がないところである。他県がやっていないから香川県もやめるべきとの声もあるが、日本の政策によって送り出された人たちが、見放されようとしている現実をしっかりと認識する必要があると考える。



意見交換の様子



記念撮影

(4) パラー日系商工会議所訪問

令和7年8月29日(金) 15:10～15:40

応対者：副会頭 山本 陽三 氏（北伯香川県人会名誉会長）

事務局長 長石 ジュリエッタ 氏

同行者：北伯香川県人会会長 稲垣 山本 ルシア てい子 氏

北伯香川県人会副会長 大西 康宏 氏

概 要：

パラー日系商工会議所は、パラー州における日系企業や日系人経済人のネットワークを構築し、地域経済の発展と日伯間のビジネス交流を推進している経済団体であり、会員企業への経済情報の提供や、ビジネスセミナー、ネットワーキングイベントの開催を通じて、地域経済の活性化と日伯間の友好促進に努めている。また、地元社会への貢献も重視し、文化交流イベントや教育支援活動も行い、日系人コミュニティと現地企業の架け橋として重要な役割を果たしている。

商工会議所における香川県出身の登録事業者は38社と少数ながら、山本陽三氏が初代会頭で、現在の会頭を息子の山本エドワルド氏が務めるなど、香川県人会との関係性は非常に強いものがある。山本陽三氏は稲垣会長の実兄でもあり、現在も副会頭として商工会議所の運営に現役で携わっている。

また、商工会議所では、ブラジル北部の中心地でもあるベレン市の人材教育にも力を注いでいるとのことで、現在事業の中心は3世に移っており、20～30代の若者は英語も堪能で情報技術にも長けた人が多いとのことである。

しかしながら、3世・4世の日系人の子弟は、日本語や日本文化がわからない方が多くなっており、今後の日本との交流が心配である。こういう状況の中で、香川県が実施している南米交流次世代人材育成事業による青少年の交流は大変有意義であり、引き続き継続してほしいとの要望を伺った。

県人の加入が38社と少ないのは、ベレン市がまだ農業中心の経済運営をしていることにありとされる。生産してもまだまだ販売ルートが脆弱で、道路インフラや貯蔵倉庫などの物流問題、高い金利や申請書類の煩雑さが重なり、事業者の育成にまで手が届いていないようであった。

こうした商工会議所は自主運営の部分が多いと思われるが、国や州がもう少し支援する必要がある、今後、県の起業支援や企業誘致についての施策が参考になるのではないかと、そして日本からの投資も受け入れ、傘下の企業との協業や技術協力ができれば南米での大きな商業窓口になるものと考えられる。



意見交換の様子



記念撮影

(5) 越知日伯学園訪問

令和7年8月29日(金) 15:45～16:45

応対者：大谷 到 氏 ほか

同行者：北伯香川県人会会長 稲垣 山本 ルシア てい子 氏

北伯香川県人会副会長 大西 康宏 氏

概 要：

越知日伯学園 (Centro Educacional Kyoko Oti。通称、CEKO (セコ)) は、2007年に創設された幼稚園から中学までの一貫校であり、モンテッソーリ教育(自己教育力を育てる教育)やポリグロット教育(多言語習得教育)を取り入れ、幼稚園・小中学校に合計約400名が通園・通学している。日本語教育にも力を入れており、日本語の授業や一般対象の日本語学校には、約200名が通っている。

幼稚園では、1日コースの子ども達がバイリンガル教育として生活用語や言葉・日本の行事・リトミック・工作・歌・ゲームなどを学習する。小学校では「やさしい日本語」や「日本語ドレミ」を使用し、日常会話やひらがな・カタカナの読みを中心に学習し、また、日本の行事や工作・歌・ゲームなどを通して異文化教育も行うほか、学習発表会や日伯文化交流祭など学習の成果が発表できる機会を設けている。

このように確かな教育指針のもと、先生方も礼節や挨拶の1つ1つがしっかりとしており、子どもたちにとっても良い見本となっていると感じた。

幼稚園の演技、日本語の歌、和太鼓、空手の演武などを見せていただいたが、どれも練習の成果が伝わってくる見事なものであった。こういったカリキュラムを通じて日本の文化を知り、より母国日本について興味を持ってもらうことが大切で、この子どもたちの中からインフルエンサーが生まれ、日系人だけに留まらずブラジル人にしっかりと情報発信してもらえるようになることを期待する。



生徒による空手の披露



記念撮影

(6) 北伯香川県人会歓迎夕食会

令和7年8月29日(金) 19:30~22:00

出席者：北伯香川県人会会長 稲垣 山本 ルシア てい子 氏ほか県人会役員等5名、
訪問団14名

概 要：

稲垣会長、大西副会長、短期研修生の方々との会食で、時間をしっかりとって意見交換を行った。

大西副会長はトメアスに入植され、主に農業を営んでおられる。胡椒の栽培目的で入植したが、天候障害による生育不良や販売価格の不安定さもあり、大変なご苦勞を重ねられてきたとのことである。その経営の不安定さを解消するため、カカオの栽培にも着手しているが、販売先は地元の農業協同組合に頼っており、日本のJAのような共済事業はないため、安定しているとは言い難い状況のようである。

土地や作物を守るため家族や仲間と侵入者と実際戦った話などは、現代日本では到底考えられない過酷な状況であったと推測される。

当日訪問した汎アマゾン日伯協会の会長の話にもあったが、第2次世界大戦後の政策は現地に訪れた入植者も困惑したことは想像に難くない。そういった歴史を踏まえ、我々訪問団は翌日の記念式典には厳肅な気持ちで臨むべきであるという認識を得ることができた。

また、令和7年度南米次世代人材育成事業の短期研修で7月に香川県に来られたホシノ・フェリペ氏とナガセ・ベアトリス氏にも参加していただいております。交流事業についての感想を伺うことができた。お二人は研修期間中、県内の視察や文化体験、県内在住の親族との対面や、ゆかりの地の訪問など自身のルーツ探し、県民との交流を行ったとのことだが、今後の県人会活動や香川との交流事業を担う若い世代の人材育成を目的としたこの事業などを通して、移住1世である稲垣会長の世代から、2世、3世、4世と、世代を超えて県人会の精神が受け継がれ、本県との繋がりや絆が、絶えることなく続いていくことに深い感慨を覚えた。



谷久議長の挨拶



乾杯の様子

(7) 北伯香川県人会創立50周年記念式典・記念祝賀会

令和7年8月30日(土) 10:00～14:30

出席者：北伯香川県人会会員等、来賓、訪問団 約90名

概 要：

移住先没者への追悼、ブラジル・日本両国国歌斉唱の後、稲垣県人会会長、山本名誉会長が挨拶され、大山副知事、谷久議長、来賓から祝辞があった。

大山副知事と谷久議長からの記念品贈呈、移住高齢者表彰を行った後、家族会員への記念品贈呈や元研修生で高齢者表彰を受けられた方の挨拶があり、この50周年の重みを感じさせる厳粛かつ盛大な式典であった。

式典における挨拶の際、県人会の稲垣会長からは、この式典を開催する機会に恵まれたことへの感謝とともに、過去の県人会設立者等への敬意が述べられ、今回出席の大山副知事と谷久議長ほか来賓らに感謝の意が示された。そして、県庁とも交渉しながら、北伯香川県人会がサンパウロの香川県人会から分離設立された歴史及び歴代の会長についての話があった。また、現在、県人会から本邦研修に送り出している33人のうち、10人が越知日伯学園の生徒であることが紹介され、2世、3世、4世と引き継がれてきた県人会の会長として、ふるさと香川県との友好関係の継続を願っていること、パラ州にある18の県人会の中で団結力と活力を有する強い組織を目指す考えであることや、盛大な新年会を開催し、日本週間において香川県の広報を目的としたカレンダーの展示活動を展開していることの話があった。

これに対し谷久議長は、祝辞の中で、県人会が記念すべき創立50周年を迎え、式典が盛大に開催されることへの慶賀と、稲垣会長はじめ歴代役員等の熱意と尽力への敬意、高齢者表彰を受ける方々の功績への感謝を述べた後、県人会から多くの若者が海外技術研修員等として来県し、県民との絆を結んできたことの意義に触れ、県人会が創立された50年前からのふるさと香川の変化の様子、とりわけ、新しく高松駅周辺にオープンした県立アリーナや、南米ウユニ塩湖のような写真が撮れると話題の父母ヶ浜などの賑わいぶり、本年開催の瀬戸内国際芸術祭に海外からも多くの方が来県していることを報告した。最後に、移住された方々の活躍を祈念し、県人会との一層の友好とともに、幅広い交流を通じた活動の支援や、本県との友好親善関係の強化の考えを述べた。



祝辞を述べる谷久議長



記念撮影

式典終了後、祝賀会が開かれ、訪問団は自席を離れ、各テーブルを回って意見交換を行った。

日本語が得意ではない、3世4世の若い研修生のテーブルでは日本語のできる会員が通訳を名乗り出てくれたことにより、短い時間ではあったがお話を聞くことができた。ある短期研修生は日本での経験を楽しそうに話してくれた。「大阪・関西万博に行けて良かった。」「もっと日本語を勉強したい。」「日本のアニメが好きだ。」という話もしてくれた。

また、年配の会員の方からは、苦労はしたがここでの生活に満足しているというお話も伺った。慶祝団として副知事、県議会議長、県議団からなる8人と職員4人、経済界2人の訪問は北伯香川県人会にとって誇りであり大変重要でありがたいというお言葉もいただいた。

お話を聞く中で感じた課題としては、短期研修は期間が短く、しっかりとした技能を習得するためには半年くらいの長期に渡り留学するなど、スキル向上のための制度をより一層充実させていく必要があり、香川県の中で、企業も交えた受け入れのあり方など検討していく必要がある。

そして、単なる交流にとどまらず、また日系人を単純労働者として受け入れるのではなく、高度人材の育成やそうした人材の活躍の場を香川県とブラジルの両国に作っていくことで少子化と労働力不足、そして収益性の高い産業の育成など、県人会を通じた成長戦略をしっかりと作っていくことが求められていることを認識した。



記念ケーキカット



県人会の皆さんとダンス

(8) ブラジル香川県人会創立70周年記念式典・記念祝賀会

令和7年8月31日(日) 10:30～15:00

出席者：ブラジル香川県人会会員等、来賓、訪問団 約250名

概 要：

移住先没者への追悼の神事後、ブラジル・日本両国の国歌斉唱、菅原会長の挨拶があり、大山副知事、谷久議長、在サンパウロ日本国領事館、ブラジル日本都道府県人会連合会及びJICAブラジル事務所から祝辞があった。

大山副知事と谷久議長から、移住高齢者表彰、知事表彰、記念品贈呈を行った後、元研修生代表から挨拶があり、香川県民歌を斉唱して式典は終了した。

式典における挨拶の際、県人会の菅原会長からは、今回出席の大山副知事と谷久議長ほか来賓らに感謝の意が示された。続いて、このように盛大に70周年記念式典を開催できることへの深い感慨や、県の支援と過去の歴代会長や役員の尽力に対する感謝と、日本文化継承の賜物であるとの思い、そして、この式典の前に1955年、木田農業学校、現在の香川大学農学部の卒業生を中心とした県人会発足メンバーの写真を見返したが、会長の両親、兄弟も共に写ったこの写真が、思えば県人会活動の原点だったのかとの思いを述べられた。また、既に50年を超えた技術研修や日本語研修に加え、今年から短期研修制度が実現し、たくさんの子弟の応募の中から計9名の研修生が香川県を訪れ、その伝統文化や先祖のルーツに触れるすばらしい機会を得ていること、今年は日伯友好130周年でもあり、今後ますます香川県との文化交流が活発に続くよう、次世代の育成に努めていく旨の決意などが示された。

これに対し谷久議長は、祝辞の中で、県人会が記念すべき創立70周年を迎え、式典が盛大に開催されることへの慶賀と、菅原会長はじめ歴代役員等の熱意と尽力への敬意、高齢者表彰を受ける方々の功績への感謝を述べた後、県人会から多くの若者が海外技術研修員等として来県し、県民との絆を結んできたことの意義に触れ、移住が始まった大正、昭和、平成そして令和と様々な変化を遂げてきたふるさと香川の様子、とりわけ、県立アリーナや父母ヶ浜などの賑わいぶり、本年開催の瀬戸内国際芸術祭に海外からも多くの方が来県していることを報告した。そして最後に、移住された方々の活躍を祈念し、県人会との一層の友好とともに、幅広い交流を通じた活動の支援や、本県との友好親善関係の強化の考えを述べた。



祝辞を述べる谷久議長



香川県民歌の斉唱

式典終了後、祝賀会が開かれ、県人会剣道部プレゼンテーション、県人会の講座及び活動紹介、ダンスパフォーマンスが次々と披露された。



県人会の講座・活動紹介



県人会会員の皆さんと

(9) ブラジル日本移民開拓先没者慰霊碑献花・参拝

令和7年9月1日(月) 9:00～10:00

応対者：ブラジル日本都道府県人会連合会 副会長 文岡 正樹 氏
同 副会長 多田 マウロ 孝則 氏

同行者：ブラジル香川県人会会長 菅原 パウロ 農夫男 氏

概 要：

1975年、多くの人々の支援、協力により、サンパウロ市のイビラプエラ公園内に、現地ブラジル日系移民団の総意として日本移民開拓先没者慰霊碑が建立された。ブラジルの土と化した多くの日本移民先駆者の霊を祭るこの慰霊碑は、今やブラジル日本移民の心情的拠点となっている。

今回参拝したこの慰霊碑は、高さ170センチ、幅250センチ、厚さ30センチの5トン以上ある黒御影石に田中角栄元総理の印形で作成されたものである。また慰霊碑の地下に霊廟も設けられ、物故者の過去帳もお供えされている。

現在、毎年6月18日の「移民の日」に行われる慰霊碑参拝は日系コロニアの公式行事となり、日本からの公式訪問者、個人からの献花も絶えず、日本移民のこの国での地位を誇り高く物語っている。

日本からブラジルを訪問する多くの皇族方、歴代総理大臣、閣僚、国会議員、県知事・県議会議員を中心とする各県訪問団及び各個人の方々も多く参拝している。

参拝に先立ち、ブラジル日本都道府県人会連合会の文岡副会長、多田副会長からこの慰霊碑の説明を受けた。

移民の多くは出稼ぎが目的で農業経験のない人も多くおり、一日も早く祖国に錦を飾ることを目指したが、小さい住居を与えられ、日本と同様の食事もできず、ポルトガル語も話せず、想像を大幅に下回る賃金に大きく失望した。夜逃げする人もいたが、入居時の借金を返済するまではその地を離れるわけにもいかず、マラリアの大流行にさらされ多くの人が病院で治療を受けることもできず犠牲になったこと、戦後、移民を送り出した日本海外移住家族会連合会の人が移民のその後を知るため南米視察に来て、多くの移民が夢かなわずに亡くなった実情に驚き、彼らを弔うための場所を作る運動をはじめ、慰霊碑建立に至ったこと、また、近年、調査の結果明らかになったが、戦前にブラジルへ渡航中、移民船の中で亡く

なり、ブラジルの地に上陸できなかった約500名の名簿を書き写した新たな過去帳も備えたこと、などの話があった。

入植当時の大変厳しい環境の中、病気その他で亡くなられた日本移民の先駆者の方々のご労苦に思いを馳せつつ、参加者全員（大山副知事・谷久議長を始めとした県議会議員）で慰霊碑に参拝し、副知事・議長名で献花と記帳を行った。その後地下の霊廟にも参拝し、先人の霊に対して心静かに祈りをささげた。



慰霊碑前での説明



谷久議長による記帳

(10) ブラジル日本商工会議所訪問

令和7年9月1日(月) 10:30～11:00

応対者：事務局長 村田 俊典 氏

同行者：ブラジル香川県人会会長 菅原 パウロ 農夫男 氏

概要：

ブラジル日本商工会議所は、1926年に日系雑貨輸入商8社が同業者の親睦を深め、商業の発展に尽力する趣旨のもと、商工組合を設立したことに端を発し、日伯貿易の拡大に伴い1940年にその設立が公表され、以降、日伯間の経済・貿易・商工業の促進、日本企業や日系企業、現地企業間の経済交流、会員への情報発信、ビジネス環境改善のための提言活動などを行っている。

ブラジルの関係省庁、州政府や在ブラジル日本国大使館、在サンパウロ日本国総領事館、JETRO、JICA等の公的機関との連携をはじめ、会合や勉強会の開催による会員企業間のネットワーク強化、シンポジウム等の開催を行っており、日本企業の現地法人だけでなく、日系人により設立された企業、ブラジルの地場企業、外資企業等、300社を超える会員を誇っている。

村田事務局長からブラジル経済と世界経済の相関関係や歴史的な変遷について説明をいただいた後、質疑応答を行った。村田事務局長は大学卒業後、三和銀行（現三菱UFJ銀行）に入行後、40歳でブラジルにてヘッドを務め、その後総合商社である双日に移りブラジル担当となり、28年間ブラジルで勤務することとなったそうであり、銀行と商社で培った人脈と商流が現在のポジションで生かされているものと思われる。

質疑応答の中で、寡占による収益力について質問した。ブラジルは新興国特有のそして南米という地域性からインフレが進行し、その進行を抑えるべく高い政策金利を設定している。それゆえに、企業は借入れコストがかかることで、事業がある程度軌道に乗れば売却したり、上手くいかなければ廃業・倒産という形で

事業淘汰が進むことになる。生き残った企業は市場を寡占することとなり、需給バランスにおいて需要が供給を上回るとたちまち価格が上昇、すなわち生き残った企業が高い収益を得ることができるという回答があった。

長い年月低金利が続いた日本経済は、不採算な企業も延命し、適正価格を壊してきた歴史がある。低金利の弊害であったが、今回の話を通じて日本のインフレが進み政策金利も上がりつつある現状を改めて認識し、競争力が生まれる時代が来ようとしているとの思いを持った。



ブラジル日本商工会議所の説明



記念撮影

(11) 在サンパウロ日本国総領事館訪問

令和7年9月1日(月) 14:00～15:00

応対者：総領事 清水 享 氏、副領事 野上 由佳 氏

同行者：ブラジル香川県人会会長 菅原 パウロ 農夫男 氏

概 要：

在サンパウロ日本国総領事館は、南米最大の都市サンパウロに位置し、在留邦人や日系人コミュニティの支援、領事業務、日本とブラジルの友好促進を担っている。旅券や証明書の発給、在留届や各種相談への対応、緊急時の支援等の業務に加え、文化交流や経済活動の促進にも力を入れており、日本文化紹介イベントやビジネスセミナーを開催している。

また、サンパウロ市には世界最大級の日系コミュニティがあり、世界で唯一、47都道府県の県人会が存在する都市となっている。総領事館は両国の架け橋としての役割を担っている。

ここでは、サンパウロ州の概要や日系社会の現状と課題について説明を受けた。サンパウロ州は、ブラジル全土の3%程の面積（本州と四国を合わせた面積と同等）であるが、州の人口は約4,600万人で市の人口も約1,200万人であり、ブラジル経済の約3分の1、人口の約5分の1を占める南米最大の要衝となっているとの説明があった。また州のGDPは日本円で約78兆円程度であり、19世紀にコーヒーや鉄道建設により発展し、20世紀に工業都市に発展した。現在は農業、食品、自動車、航空産業等の製造業、商業・金融保険等のサービス業を中心とする都市となっている。

サンパウロの日系社会はブラジル全土の約270万人の半数近い約130万人が暮らしていて、特に日系移民は農業分野での貢献が多く子女教育に力を入れる「勤勉・正直・尊敬」のイメージを持たれている。

今後の問題として日系社会の諸活動への参画・日本語の継承、地域間の日系団体の連携、人的交流の促進などが挙げられた。



説明を受ける訪問団



記念撮影

(12) アリアンサ文化センター訪問

令和7年9月1日(月) 15:30～16:30

応対者：日伯文化連盟会長 竹田 クラウドディオ 勇 氏

日伯文化連盟文化担当理事 藤永 英明 カルロス 氏

日伯文化連盟教育コーディネーター ソアレス・ウィリアム 氏

同行者：ブラジル香川県人会会長 菅原 パウロ 農夫男 氏

概 要：

アリアンサ文化センターは、1954年のサンパウロ市政400周年時に、日系コミュニティとサンパウロの知識階級が協議し創立された非営利団体である日伯文化連盟によって運営されており、日本語を学びたい学習者向けの日本語コースに加え、日本の文化に興味を持つ方向けの書道や生け花、折り紙からヒントを得た「折り布」等のアートコースを設けている。また、政府の支援を受けず、学習者の受講料と会費のみで運営されており、20代の大学生を中心に、10代から80代までの広い世代が学習している。非日系人の学習者が増加を続けており、近年では、半数以上が非日系人となっている。

コロナ以降、オンライン授業に盛んに取り組んでおり、現在でも多くの学習者がオンラインで受講している。

教室1室1室がコンパクトで、大型モニターが設置され設備も充実しており、図書館の蔵書も、寄贈されたものも含め豊富で、日本の図書館同様に貸し出しも行われている。日本のコミックも蔵書されており、人気があるとのことである。

日本語コースについては日本語検定にも通じるものがあり、香川県への技能実習への対応もされているようで、香川県との連携も視野に話し合いが行われた。こういったマッチングは大変重要であり、お互いのニーズを直接伝えることのできる機会は貴重なものとする。



展示作品を視察



意見交換の様子

(13) ブラジル香川県人会歓迎夕食会

令和7年9月1日(月) 18:00~21:00

出席者：ブラジル香川県人会会長 菅原 パウロ 農夫男 氏ほか県人会役員等約20名、
訪問団14名

概 要：

訪問団とサンパウロ在住の県人会の皆様との最後の夕食会ということもあり、多くの県人会の方々に参加していただいた。

大山副知事、谷久議長による挨拶に続き、訪問議員を代表して宮本議員が乾杯の発声を行い、会が始まった。会の冒頭、参加者の紹介をする際には、出身地も含めお互いの紹介を行った。

前日から行動を共にしていたこともあり、互いに打ち解けて話をするのができ、人と人の交流とはこういった和やかな中で深まっていくのだと感じた。県人会顧問の浜岡様ご夫婦も訪問団と意見を交わしご助言もいただいた。また、2世、3世、4世などの元研修生の方々も数人参加されており、現在の仕事の内容や生活の状況など、統計資料には表れない世情について伺うことができた。



宮本議員による乾杯の発声



記念撮影

(14) JETROサンパウロ事務所訪問

令和7年9月2日(火) 8:45～9:30

応対者：事務所長 井上 徹哉 氏ほか

概 要：

JETROサンパウロ事務所は、日本の貿易振興に関する事業を中心に行う経済産業省所管の独立行政法人であり、市場調査や商談会、セミナー等の開催、日本企業の進出サポート等を行っている。

ここでは、井上事務所長からブラジルの基礎情報、海外進出日系企業の実態調査結果概要、ブラジルの政治概況、経済概況について説明をいただいた後、質疑応答を行った。

ブラジルのGDPの約7割がリオ、サンパウロであり、所得階層でも上位が多いのがサンパウロを含む南東部と南部である。日本人が思う以上にIT化が進んでおり、ほぼ全国で店舗での電子決済が可能となっている他、ブラジル版マイナンバーはほぼ全国民が登録されている。国民性として貯蓄よりも消費が盛んで消費支出も多い。中国の進出が顕著であり脅威となっている。

現在のルラ政権の特徴は全方位の対外関係を重視し、ブラジルの立場と利益を念頭に、欧米諸国のみならず、中国を含むBRICS諸国などとの関係も重視することで、インドに並ぶ高い経済成長を続けている。農作物や地下資源といった一次産品だけに頼らない、高付加価値の産業育成、バイオ燃料などの再生エネルギーの活用など、国際競争力を高め、メルコスールという南米経済圏のリーダーとして今後注目すべき存在である。

訪問団からは、人材の交流や育成、日本への受け入れ、女性の社会進出の状況、日本からの出資によりブラジルでも事業の共同運営の可能性があるかなどについて質問がなされ、そのような相談も今後幅広く聞いていただけるとのことで、我々訪問団がその架け橋になることが重要であると考えられる。

一方、道路インフラの整備の遅れ、貧富の格差の拡大、インフレの進行を抑えるための高い金利は新興国ならではの課題であるとともに、創業の申請や各種手続きの煩雑さが問題となっており、中小の企業が進出しづらい環境であり、JETROの今後の取り組みについては引き続き注視して行く必要がある。また香川県においても今まで以上にJETROの活動について企業に向けて啓発活動が続けていく必要を感じた。



意見交換の様子



記念撮影

(15) エンブー市役所訪問

令和7年9月2日(火) 11:00～11:30

応対者：市長 ウーゴ・プラド 氏 ほか

同行者：ブラジル香川県人会会長 菅原 パウロ 農夫男 氏

概 要：

エンブー市は、ブラジルサンパウロ市の中心から27キロメートル南西に位置する人口約25万人の都市で、花や野菜の栽培が盛んなことから「花の街エンブー」と呼ばれている。また、芸術家が多く住み、工芸フェアにはたくさんの人が訪れることから「芸術の街エンブー」ともいわれている。

また、エンブー市は、1980年から滋賀県日野町と交流を続け、姉妹都市となっている。本年3月、同町との姉妹都市提携40周年記念式典出席のため、エンブー市訪問団が来日した際、エンブー市在住であり、日野エンブー友好会長である菅原会長も訪問団に同行しており、菅原会長が香川県の出身というつながりをきっかけとして、市助役、商工会長をはじめとしたエンブー市訪問団が本県を訪れ、県内企業の視察や知事表敬を行っている。

到着したエンブー市役所前は道路の整備工事が行われており、車の往来も多く活気にあふれた第一印象であるが、市長ウーゴ・プラド氏をはじめとした市幹部職員や商工会職員らに出迎えていただいた。大山副知事、谷久議長の挨拶の後、プラド市長の挨拶、市の概況説明があり、市の中心的な場所ロッサ・セニョーラ・ド・ロザリオ教会を視察させていただいた。17世紀にイエズス会が丘の上に作ったこの教会は観光の名所でもあり、周辺には商店が並ぶなど賑わいを見せていた。週末には芸術フェアが開催されており、香川県からは瀬戸内芸術祭や今年開場した県立アリーナ周辺のプロムナードやイベントなどについて紹介をし、お互いの取り組みについてエールを送りあった。



意見交換の様子



記念撮影

(16) エンブー商工会訪問

令和7年9月2日(火) 11:50~12:20

応対者：会長 イヴォ・ヒベイロ・ファリアス 氏 ほか

同行者：ブラジル香川県人会会長 菅原 パウロ 農夫男 氏

概 要：

エンブー商工会（略称ACISE）は、エンブー市における商業・工業分野の発展と地域経済の活性化を目的とした団体であり、会員企業への経営支援や情報提供、地元行政や他団体との連携によるビジネス環境の改善支援等、エンブー市のビジネスコミュニティの中心的存在となっている。県人会の菅原会長も当該商工会の会員であり、本年3月には、市助役、商工会長をはじめとしたエンブー市訪問団の一員として本県を訪れ、県内企業の視察や知事表敬を行っている。

人口約25万人の規模にしてはコンパクトな建物ではあるが、観光資源も豊富であり、職員の意気も上がっていると感じた。サンパウロ市中心地からのアクセスの良い立地ということもあり、国内外からの観光客誘致が可能であり、商工会幹部からの説明にも熱が入っていた。女性部の活躍も紹介され、訪問団に女性も参加していただき意見交換したいという提案をいただいた。



意見交換の様子



記念撮影

7 所感（成果及び県政への反映方策）

議長 谷久 浩一

北伯香川県人会創立50周年記念式典・祝賀会、ブラジル香川県人会創立70周年記念式典・祝賀会に参加するため、慶祝団を結成し、ブラジル連邦共和国のベレン、サンパウロを訪問し、移住者や県人会の皆様との交流を深めてまいりました。

今回の訪問により、友好親善を更に進展させることができたほか、経済交流や人的交流の観点でも、ブラジル・香川間の距離や時差等の課題がある中、今後、細かい調整や協議が必要ではありますが、具体化されそうな案件もあり、訪問の成果と考えています。

一方で、日程・スケジュールがタイトであったため、現地の風土やニーズを深く知るための時間が十分に取れなかったことは課題であると感じました。

北伯香川県人会の稲垣会長をはじめ、会員の方々にはお忙しい中にも関わらず、ヴァウ・デ・カンス国際空港までお出迎えをいただきました。

ベレンでは、県人会会員の方が出店されておられるショッピングモールを見学したほか、在ベレン領事事務所、汎アマゾン日伯協会、パラー日系商工会議所を訪問し、県人会の方々の活躍の一端を拝見することができました。また、越知日伯学園では日本語教育にも力を入れており、ブラジルの人材育成だけではなく、日本文化の伝承にも注力いただいていることを心強く感じました。

式典では、移住高齢者表彰が行われ、8名の方が表彰を受けられました。これまで北伯香川県人会からは多くの若者が海外技術研修員等として、来県しており、経済・社会文化等について理解を深めていただくとともに、県民との絆を綿々と結んでこられたことに意義の深さを感じています。

ブラジル香川県人会の菅原会長とご関係者の方々には、グアルーリョス国際空港到着が夜遅い時間であったにも関わらず、お出迎えいただき大変恐縮いたしました。

式典では、北伯香川県人会と同様に移住高齢者表彰や功労者表彰（憲法記念日知事表彰）が行われ、功労者表彰を菅原会長が受賞されました。長年にわたり県人会の発展、ブラジルと日本、香川との親善や日系社会の連携にご尽力いただいたことに改めて感謝申し上げたいと思います。

また、海外技術研修員、南米交流次世代人材育成事業研修員、留学生等多くの若者が来県し、経済や文化について関心を深めて積極的に理解され、さらにブラジルに帰国後は学んだことをしっかりと発信しようとする姿に接し、今後の交流事業に対する期待が更に膨らみました。

翌日には、ブラジル日本都道府県人会連合会の役員の皆様にお世話いただき、ブラジル日本移民開拓先没者慰霊碑に献花・参拝いたしました。当時のご苦勞に思いを馳せるとともに、繁栄の礎を築いてこられたことへの感謝、御霊のご平安、ご家族の方々の繁栄をお祈りしました。慰霊碑は県人会連合会の会員様のご尽力により大切に守られ、ブラジル日本移民の心の拠り所として現在に至っています。



現在活発に活動している県は、わが県の他には群馬県とのことであり、時代の変化に伴い、会員数の減少や日系ブラジル人の心の現地化が進んでいるとの話を伺うことができました。

このほか、ブラジル日本商工会議所、在サンパウロ日本国総領事館、アリアンサ文化センター、JETROサンパウロ事務所等を訪問しました。本州と四国を合わせた面積に相当するサンパウロ州は、ブラジル経済の三分の一を占める南米最大の要衝であると同時に世界で唯一47都道府県の県人会が存在する都市でもあります。公的機関をはじめ日伯間の経済、貿易、商工業の中心地として日系コミュニティと連動しながら情報発信やビジネス環境の改善促進を図っているとのことでした。

また、エンブー市役所、エンブー商工会訪問の際にはウーゴ・プラド市長、イヴォ・ヒベイロ・ファリアス商工会長、議長などにお出迎えいただき、財政上の課題、人材育成、市の位置や利便性からの交通の結節点（物流の拠点化）など、共通の課題や取組方法などについて意見交換を行いました。

日系の皆様の高齢化や2世、3世、4世と世代交代をしていく中、香川の風景も、大正、昭和、平成、令和と様々な変化を遂げています。現在、サンポート高松周辺の開発が進み、瀬戸内国際芸術祭や万博等も開催され、にぎわいが創出されております。県人会の方々には、発展しつつあるふるさと香川とともに変わらぬ風景もご覧いただきたいと思います。

祖国やふるさと香川への深い愛情と想いを県人会の方々が抱かれているのと同様に、移住された方々やその子孫の皆様が、様々な分野でこれまで以上に輝かれ、活躍されることを願うばかりです。

お互い離れた地ではありますが、香川をふるさとに持つ私たちの絆は永遠に変わらないと信じています。

この度の訪問でお世話になりました多くの関係者の方々に心から御礼申し上げるとともに、今後とも幅広い交流を通じて県人会の活動を支援し、友好親善関係の強化に努め、わが県にとって有益な情報や施策をしっかりと活かしてまいりたいと考えております。

議員 宮本 欣貞

久しぶりにブラジルを訪問し、旧知の皆様会い、昔話もたくさんしました。

ご高齢の皆様もお元気で、安心しました。それぞれの土地での所感を記します。

<ベレン>

ベレンの街は、まだ地方都市のイメージも残されていますが、11月開催のCOP30に向けて急ピッチの整備が進められており、空港はじめ市内のインフラ整備が急激に進んでいる印象を受けました。

ベレンで訪問した中では、汎アマゾン日伯協会が印象的でした。堤会長から、ベレンにある18の県人会の中で、香川県が一番と言っているくらい活発に活動してい



ると嬉しい発言をお伺いしました。

また、会館の建設には、香川県出身の神内氏も多大な貢献をされており、当時を知る者として、会館の玄関のプレートに、氏の名前が記載されていることに誇りを持つとともに、非常にうれしく感じました。

ベレンの北伯香川県人会創立50周年式典では、稲垣会長が、移住の歴史について少し触れておられましたが、何回聞いても、当時の厳しい生活から、ご苦勞を乗り越え、現在まで命を紡いでこられたことに頭が下がる思いです。そして、「母県からの慶祝団」と、我々を最大の敬意をもって迎えてくれたことに感謝の念がたえません。

ベレンの県人会は、サンパウロの県人会から分離してできたとのことでした。飛行機で3時間以上かかったのも、その距離は、かなりのものであり、50年前には、さらに遠かったと思われるので、ベレンで県人会を立ち上げたのも納得できることでした。

稲垣会長もまだまだパワフルで、これからもご活躍されることと思います。会長からは、短期間の香川県への派遣事業（県人会の子息を10日程度、香川県へ来てもらい、香川県を視察し見聞を広めるとともに、ルーツ探しなどにより、香川県との縁を確認する事業。県国際課によるとR5年の南米訪問の際、サンパウロのブラジル県人会からの要望で立ち上げた事業とのこと）について、県人会のすそ野を広げるためにも素晴らしい事業であるとお褒めの言葉をいただきました。

また、5年前の記念式典は、コロナの影響でベレンには来られませんでした。稲垣会長は「参加してもらえなかったことが非常に残念で、母県に見捨てられた感じがして、とても寂しかった。今回は大勢の方に記念式典に参加してもらい、とてもありがたく、母県とのつながりを強く感じる事ができた。たくさんの方に参加していただけることが、私たちにとって、母県とのつながりの強さを感じることができる唯一の指標なので、これからも多くの皆様に訪問団として来て欲しい。」との強い要望を受けました。

＜サンパウロ＞

サンパウロのブラジル香川県人会創立70周年記念式典は、約250人の参加者があり、来賓も総領事やJICAの所長、他の県人会の役員など、多彩な顔ぶれでした。

厳かな神事のあと、式典が進められました。式典の後は祝賀会となり、演舞などの出し物で盛り上がる中、皆様に挨拶をして回りました。元会長の浜岡氏ほか、以前の訪問でお世話になった重鎮の皆様など、懐かしい面々もご健在で安心いたしました。

会場は、南米県人会館で、こちらの建設にも神内氏からの支援がかなりあって完成しており、その経緯を知る数少ない関係者として、感慨もひとしおでした。

翌日、ブラジル日本移民開拓先没者慰霊碑の参拝時に、県人会連合会の文岡副会長から、移民団の歴史、当時の状況、苦勞話などを拝聴いたしました。かなり過酷な状況であったことや、のちに地元の議員等の尽力により、現在の慰霊碑が建立されたとお伺いしました。何度も訪れた場所ではありますが、今、平和で穏やかにブラジルで暮らしておられる皆様の先人たちに対し、改めてそのご苦勞を労う気持ちでいっぱいになりました。

そのほか、日本総領事館や日本商工会議所、日本語学校なども訪問しました。ブラジルでの生活について、日系社会について、日本からの企業進出での成功のポイント、日本への留学の可能性などの話を具体的に聞くことができ、今後の経済交流にも

役立つ話を多く伺うことができました。

ぜひとも、今回の訪問の成果を足掛かりに、今後の交流を深めていきたいと思いをします。

今回、2か所を訪問して感じたのは、県人会の会員の皆様の経済的な安定です。かつては、まだまだ経済的に安定していない人も多かったように思いますが、今回の訪問では、そのような印象は薄く、むしろ経済的に豊かな人が増えている印象を受けました。

これもひとえに、県人会を中心とした皆様の経済活動の賜物であり、今後、香川県との関係がさらに強固なものになれば、お互いにメリットがあるのではないかと感じました。

また、世代交代が進む中、香川県との繋がりが弱くなっていくことを危惧する声は、特に年長者に強く、危機感を抱いておられました。今後とも、たくさんのメンバーによる訪問団を継続して送り、現地の期待や要望に応える取組みは非常に重要であると強く感じました。

県人会のメンバーに若い人がまだまだ少ないようですので、若い人が増えるような施策を打ち、次の世代の県人会が大きく羽ばたくような努力がこれまで以上に必要であるとも感じました。

議員 松原 哲也

この度、ブラジルにおける香川県人会の記念すべき節目に際し、パラ州ベレン市では、北伯香川県人会創立50周年記念式典、サンパウロ州サンパウロ市では、ブラジル香川県人会創立70周年記念式典に参加する機会を得ました。加えて、在ベレン領事事務所並びに在サンパウロ日本国総領事館を訪問し、各地域の情勢や日本との関係等について懇談を行うとともに、今後の本県との人材協力や連携の在り方について意見交換を行いました。



ベレンでは、パラ州内の「御三家」といわれる日系主要3団体のうち、「汎アマゾン日伯協会」及び「パラ日系商工会議所」の皆さんから、活動内容や現地経済の最新動向や実情等を伺い、本県との一層の連携や協力関係の拡大を通じた、産業・文化振興について意見を交わしました。その他、2007年に創設された越知日伯学園では、当学園の卒業生が香川で将来活躍してくれることを願い、施設見学や意見交換等を行いました。

サンパウロでは、ブラジル日本商工会議所、アリアンサ文化センター、JETROサンパウロ事務所、エンブー市役所並びに商工会を訪問し、県内企業の海外展開など、幅広い分野での経済協力の在り方について等の意見交換を行いました。そして、サンパウロ市郊外に建立されている開拓先没者慰霊碑に献花を行うなど、移民の歴史と先人への敬意を改めて胸に刻む行程となりました。以下に主要な概要を報告いたします。

まず、ベレン市で行われた北伯香川県人会創立50周年記念式典では、アマゾン河口域の地に根を張り活動してきた半世紀の歩みが振り返られました。気候や生活習慣の違いという困難を克服しながら、地域社会に溶け込みつつ「香川の心」を大切に守り続けてきた姿は、参加者一同に深い感銘を与えました。式典では、稲垣会長、山本名誉会長の挨拶ののち、大山副知事、谷久議長等が祝辞を述べ、記念品の交換や高齢者表彰などが行われました。また会場では、太鼓やカリンボなどの両国における文化活動も披露され、香川県民歌を皆で合唱する等、香川県の伝統がブラジルの地で今なお生き続けていることを実感するとともに、今後も受け継がれていくことを心から願うばかりでありました。

式典前日に、在ベレン領事事務所を訪問し、事務所長と懇談しました。移民史の意義や、現地日系社会の教育・文化活動への支援の現状について意見交換を行い、日本とブラジルの交流が今後ますます重要性を増していることを確認しました。そして特筆すべきは、現在ベレンを含むパラ州で活動する各県人会の中でも、香川県人会が最も広く活発に活動しているとのことであり、事務所長からも大変感謝されている旨の報告がありました。

続いてサンパウロ市では、ブラジル香川県人会創立70周年記念式典に臨みました。サンパウロは世界最大の日系社会を有する都市であり、香川県出身者はその形成に大きな役割を果たしてきました。戦後間もない困難な時期に発足した県人会は、相互扶助と教育支援を柱に活動を展開し、地域社会の発展に大きく貢献してきました。式典に先立ち、移住先没者への追悼が神式で行われ、式典では菅原会長のあいさつ、大山副知事、谷久議長等の祝辞があり、歴代会長や移住功労者への表彰が行われ、会員や3世・4世の若い世代が誇りを持って活動に参加する姿が印象的でした。そして元研修生等による活動報告や剣道部プレゼンテーション、香川ダンスグループによるダンス発表などがあり、香川県の文化を守り伝えるとともに、ブラジル社会との架け橋として未来を担う世代の力強さを感じました。

式典翌日に、同市内にある開拓先没者慰霊碑を訪れ、献花を行いました。この慰霊碑は、過酷な環境の中で夢半ばにして亡くなられた多くの移民の方々を追悼するために建立されたもので、先般、秋篠宮家の佳子さまも献花に訪れました。碑前に立ち、犠牲と努力の上に今日の繁栄と日系社会の発展があることを改めて胸に刻み、深い感謝と哀悼の意を表しました。慰霊のひとときは、香川県人会の歴史を単なる祝賀としてではなく、先人への敬意とともに未来を考える機会へと昇華させるものでありました。

また、在サンパウロ日本国総領事館を訪問し、総領事と懇談しました。サンパウロにおける日系社会の現状や、文化交流、経済交流の今後の可能性について幅広く意見交換を行い、香川県としても海外県人会とのネットワークをより活発にし、次世代の交流機会を拡大していくことの重要性を再認識しました。

今回の訪問を通じ、ブラジルに渡った香川県人が築き上げた歴史の重みと、現地社会における信頼と尊敬の厚さを肌で感じました。気候風土の違いや言語の壁を越えて根付いた香川県人の歩みは、郷土の誇りであり、また日本とブラジルを結ぶ絆の象徴であります。今後は、行政や教育機関、文化団体が連携し、香川県人会との交流をさらに強化することで、若い世代へとその絆を継承していくことが求められます。

今後の国際交流拡大や地域の発展に必ず寄与されるものと確信しております。

議員 森 裕行

日本人の南米移民は1908年に移民船「笠戸丸」でサントスに到着した781人をはじめとして、1900年代前半には、多くの日本人がブラジルへと渡り、コーヒーなどを生産する農場の契約農民として農業労働に従事しました。ブラジル内陸部での労働は、収穫、収入の面で、当時の日本政府の支援を受けた移民会社が国内で行っていた広告のうたい文句とは大きくかけ離れたもので、参加した多くの人たちが考えていた数年間



の辛抱で、その間に蓄えたお金を持って日本に再び帰るという出稼ぎ的なものではなく、多くの人は食料、住居、医療面で過酷な状況におかれていました。

1920年代に生じた日本国内の経済危機から世界恐慌の時代において特に農村部では大変な打撃を受けていたことから、当時の政府は1925年から移民の渡航費用を大きく支援し、大規模な移民を推奨しました。1908年から1941年までの間に18万8千人がブラジルに移民していますが、1925年から1935年までの10年間だけでも13万5千人がブラジルに送り出されています。この時期は日系ブラジル人の間では「国策移民の時代」と呼ばれています。

1937年に大統領に就任したヴァルガスが新体制を築き、日本語学校や日本語新聞の発行が禁止され、日系移民の共同体は大きな制限を受けることになり、1941年に日本と連合国が戦争状態に入ると、ブラジル政府は日本との国交を断絶し、ブラジル国内では日本語の使用が禁止され、日本人所有の農場、商店、工場、銀行、病院などの一部が政府により接収されて、多くの日本政府関係者がブラジル国内から撤退すると、日本の移民者たちは本国との連絡を失い、移民同士の情報交換も厳しく制限されました。

1950年代半ばより日本政府は、戦後の急激な人口過剰への対策を迫られ、その一環として、外務省移住局、日本海外協会連合を設立し、大規模な移民送り出し政策に乗り出しました。その結果、1952年から1973年までの間に約6万人がブラジルに移民することとなりました。その中でブラジルの日系移民コミュニティは、これらの移民の流れの中で新しい構成を得ることにより、新たな発展もすることができています。

ブラジル日系移民の方々は「我々の祖先は、ほとんどだれもがエンシャーダー（鋤）を手にした」と言われています。つまりブラジルにおける日系移民の先駆者はそのほとんどが農民であったということです。彼らの農業分野での活躍は目覚ましく、ブラジル経済への重要な貢献を行っています。さらに、日系移民とその子孫が独自の労働倫理をもって政治、経済、学術、医療分野で顕著な活躍をするようになると、ブラジル社会において敬意の対象となっています。現在約300万人ともいわれる日系人口は2億1200万人からすると1.4%程度にしか過ぎませんが、日系移民とその子孫のブラジルにおける存在感は特筆すべきものであり、ブラジルはラテンアメリカでもまれにみる親日国です。

香川県から南米に移住した方々は8,535人です。全国的な状況と同じで最盛期は大

正末期から昭和16年ごろまでで、第二次大戦で途絶えていた移住はブラジルと日本政府の国交回復により再び進められました。

香川県でも1953年に香川県移住協会が設立され、翌年には本格的な移住政策を進めるために、同協会副会長が南米各地を訪問、移住県民の慰労や実情調査が行われました。その結果1955年に香川県移住者名簿が作成され、香川県移住協会ブラジル支部が設立されました。これが現在のブラジル香川県人会となっています。

県人会の皆様は、常にふるさと香川への思いを持っていただき、郷土のためにということで多くのイベントに参加するなど、香川のPRを無償で行っていただいたり、海外進出を希望する県内企業などの後押しを行っていただいています。

この様に香川のことを常に思っているブラジル香川県人会の方々が企画する周年行事にご招待をいただくのですから、県議会議員として体力が続く限り参加して、これまでのご苦勞に関し共に思いを一つにするとともに、彼らに対して母県の人間として常につながって同じ共同体の一員であることを思っている、安心して同じ香川県民として同一感を持ってもらえるような取り組みを進めていくことが、我々に課せられた使命の一つだろうと思っています。

議員 白川 和幸

今回のブラジル訪問は、私にとって2回目となり、前回の訪問で知り合った日系人の方に事前に訪問団として訪問する旨を伝えていました。大変喜んでいただき、再会を楽しみにしていると言っていたいておりました。

今回の訪問団では複数回訪問された先輩議員もあり、現地では旧交を温める場面が数々ありました。前回訪問時の思い出も含め、より踏み込んだお話もできたように感じます。



ベレン市、サンパウロ市で行われた周年行事は、母県からの慶祝団が訪れるということで、大勢の日系人の方々に遠路お集まりいただき、盛大に開催されました。主催の県人会幹部の方々にも喜んでいただいたと同時に、ご労苦に報いることができたことを喜ばしく思いました。

訪問先の行政、関係団体の関係者の方には、香川県の交流事業の活発さに敬意をもって接していただき、そういった活動を行っている香川県が羨ましいとも仰っていました。

サンパウロの式典には他県の県人会の幹部の方も来られておりましたが、慶祝団として大勢で来てくれることがとても大切で、その方の県は訪問を取りやめたり縮小したりと非常に残念であり、県人会としても今後の活動の先行きが心配であると仰っていました。

その他の県の県人会幹部の方からの質問に対し、私からは県人会の活動や研修生の活躍などの情報発信を母県に対して行いながら、最終的には人と人との交流を大切にすることが重要ではないでしょうかとお伝えしました。

今のブラジル香川県人会が、3世・4世と引き継がれているのはそういった活動の積み重ねであり、我々県議団もその意義をしっかりと認識して出席させていただいているからに他なりません。

今回特に印象に残ったのは、サンパウロでの70周年の式典・祝賀会で地元高瀬町出身の小野さんご家族と再会した時であります。お兄様は90歳、弟様は83歳ながらお元気で、再会を大変喜んでいただき、是非家まで来てほしいと誘っていただきました。行程が詰んでいることもあり難しい旨をお話すると、会場にお孫さんが来ていると仰いました。お孫さんは研修生として今年香川県に来たそうで、この記念式典のスタッフとして裏方をしており、ご挨拶をさせていただきました。まだ19歳のその若者は屈託のない笑顔で、自分は大学で人工知能の勉強をしていると話してくれました。次回香川県に来るときには是非声をかけていただければ、香川大学や香川高専を紹介したいと伝え連絡先を交換しました。

将来どう繋がっていくのか、たとえ香川県に来なくても、ルーツが香川県にある若者がブラジル社会で活躍してくれるとしたら、私はとても誇らしく思いますし、こういった人財がいることが両国の若い方々へのメッセージにもなると感じます。

また前回の訪問では経済的な繋がりをどう作っていけば良いか今一つでしたが、人的な交流が進むことで現地の企業パートナーを見つけやすくなることに改めて気が付きました。

経済成長は進んではおりますが、まだまだ日本では当たり前のことが整備されていないと感じました。逆に決済のデジタル化などで、日本の企業が見習うべき点もあると感じました。そういったお互いの国の当たり前が当たり前でない現状を認識することにより、社会課題を解決するスタートアップが生まれる材料が眠っていると感じました。我々県議団一人一人がそういった広い視点でこれからもサポートできる存在でありたいと感じた訪問であります。

北伯香川県人会、ブラジル香川県人会の皆様には、各団体へのアテンドや夕食会で大変お世話になり、一つ一つを振り返ると、そのどれもが感慨深く、これからの両国の未来に思いを馳せるとともに、あらためて日本人としての誇りを実感させていただいたことに、深い感謝の思いでいっぱいです。

最後に今回訪問団をサポートしてくださった議会事務局、国際課の職員の方々には心から感謝いたします。中でも若い国際課の職員の方にとってはこういった経験がやがて活かされていくと思いますし、活躍を期待しております。今後も大変な行程ではありますが、訪問団に若い職員さんが随行されることは、県政発展に資する知見を広める上で大変重要であると強く感じた次第であります。本当にお疲れさまでした。

議員 植條 敬介

今回の南米訪問を通じて、改めてブラジル香川県人会をはじめとする日系社会の存在の大きさ、そしてそこに息づく先人の歴史と努力を深く実感することができました。現地で出会った方々の多くが、世代交代の中で日本とのつながりを模索し続けている姿に触れ、私たちがこの交流を絶やすことなく継続していくことの重要性を強く感じました。特に印象深かったのは、イビラプエラ公園内にある日本移民開拓先没者



慰霊碑での献花です。日本から夢と希望を抱いて渡航したものの、マラリアの流行や過酷な労働環境により志半ばで亡くなられた方々、あるいは名も残されぬまま埋葬された多くの先没者の存在を思うとき、現在の日系社会の発展は、その犠牲と忍耐の上に築かれていることを改めて痛感したところです。私たちが慰霊碑の前に立つことで、この歴史を継承し、未来にしっかり伝えていく責任を負っていることも強く感じました。

また現地日系社会は文化的な絆を超えて、経済交流や企業進出を支える重要な基盤としても機能していると思います。特に再生可能エネルギーや自動車産業、農畜産物の輸出入など、ブラジル経済の成長分野には、環境技術や部品製造に強みを持つ香川県内企業が活躍できる余地が大きいと思います。JETROでの意見交換を通じて、日本企業がブラジル市場に挑戦するには現地企業や日系団体との協働が不可欠であり、県人会や商工会議所とのネットワークがいかに大きな価値を持つかを改めて確認することができました。

今回のブラジル訪問の大きな目的は、北伯香川県人会創立50周年記念式典やブラジル香川県人会創立70周年記念式典に出席し、会員の皆様と直接交流することです。県人会が日系社会の歴史や文化を守り、若い世代へ伝えていく役割の大きさを実感させていただきました。式典での祝辞や研修生との会話を通じ、現地での生活や学びの状況、若い世代が日本語や日本文化への関心を持ち続けていることを確認でき、こうした交流を引き続き進めていく必要性を強く感じました。これらの交流は、単なる親睦や儀礼にとどまらず、人材育成や地域産業の発展、双方にとって価値ある成長戦略に直結するものです。

また越知日伯学園や研修生との交流を通じ、人材育成の重要性も改めて認識しました。若い世代が日本語や日本文化への関心を持ち続けられる仕組みを作ることは、単なる文化交流を超えて、将来の高度人材育成や経済交流の基盤づくりにつながります。半年以上に及ぶ長期研修や、県内企業を交えた実践的な受け入れ体制の整備も非常に重要であり、香川県としても今後の施策にしっかり反映していく必要があると思います。

加えてパラー日系商工会議所やブラジル日本商工会議所との意見交換では、物流インフラの未整備や高金利といった課題も確認されましたが、日本の技術やノウハウが十分に生かせる余地も多く、経済交流の可能性を改めて強く感じました。香川県としても、単なる訪問や友好交流にとどまらず、現地企業とのマッチングや商談会、技

術協力や共同研究など、具体的な仕組みを積み重ねて人的ネットワークを実践的な成果に結びつけていくことが求められます。

今回の訪問を通じて最も強く感じたのは、交流の「継続性」と「実効性」を確保することの重要性です。先人が築いた歴史と信頼の基盤の上に、文化・教育・経済の三つを重ねて交流を進めることで、香川県とブラジルとの関係はより強固なものとなります。県人会を通じた人的交流は、単なる親睦を超えて、県内企業の海外展開や国際人材育成といった具体的な成果にも直結する可能性を秘めています。地理的には遠く隔たったブラジルですが、成長としての可能性や豊かな人的資源を考えれば、香川県にとって挑戦する価値のある市場であることは間違いありません。今回の訪問を契機に、慰霊碑に込められた先人の犠牲と努力を忘れず、文化・教育を通じた信頼関係の深化と、企業を巻き込んだ実効性ある経済交流を組み合わせることで、香川県とブラジル双方にとって実りある未来を切り拓いていきたいと改めて感じました。

議員 川池 秀文

今般、香川県議会ブラジル訪問団の一員として、8月28日から9月2日までの6日間、ブラジルを訪問し、「北伯香川県人会創立50周年記念式典」及び「ブラジル香川県人会創立70周年記念式典」などに出席して祝意を表しますとともに、現在活躍されている移住者や県人会の皆様との交流を通して、友好親善関係の強化に努めてまいりました。



ベレンにおいては、県人会会員の企業や在ベレン領事事務所、パラ日系商工会議所、日本語教育を推進している越知日伯学園、日本文化を継承・普及している汎アマゾンア日伯協会を訪問しました。

また、サンパウロにおいては、ブラジル日本移民開拓先没者慰霊碑に参拝したほか、ブラジル日本商工会議所、在サンパウロ日本国総領事館、日本文化を普及しているアリアンサ文化センター、JETROサンパウロ事務所などを訪問したところであります。

式典など交流の場や訪問先においては、日系人社会の現状、青少年の交流、県内企業の進出、県産品の販路拡大、日系人の香川県への受け入れ・雇用などについて、積極的に意見交換を行うとともに、本県のPRをしたところであります。

今回のブラジル訪問は、ブラジルの現状を再認識するとともに、本県とブラジルとの友好親善や経済交流などの拡大に向け、大変有意義でありました。今後の本県の国際化施策の積極的な展開が強く望まれるものであります。

（日系社会について）

ブラジルの日系社会は、1908年の日本人移住から、現在、ブラジル全土に約270万人の日系ブラジル人が在住しています。

日本から移住された方々は、厳しい自然環境や労働など大変なご労苦の中で、野菜や果物の品質向上など農業分野での大きな貢献、そして、子女教育にも力を注ぎ、

各界に多くの人材を輩出するなど、ブラジル社会において「勤勉・正直・尊敬」のイメージで、高い信頼を獲得されているとのことであり、日系人のブラジルでの貢献を改めて認識しました。

また、北伯及びブラジル香川県人会からは、今回の副知事、県議会議員、県職員からなる香川県の慶祝団について、県人会の大きな誇りであり、心から感謝するとともに、母県、香川県との親善交流は、日系社会において大変有意義であり、その継続を強く希望する旨の要望がありました。香川県人会においては、様々な活動が積極的に展開され、その活動は、地域において高く評価されているとのことでもあります。

日系社会の課題としては、若手の日系社会の活動への参画、日本語の継承、日本との人的交流の拡大などへの対応があります。

（経済交流について）

商工会議所やJETROなどを訪問し、ブラジル経済の概況説明を受けるとともに、ブラジルと香川県の経済交流について意見交換を行いました。

特に、県内企業のブラジルへの進出は、一定のシェアを確保できる特定の技術があれば十分に期待できるとのことであり、日本とブラジルの輸送・移動コストを考えると、高付加価値型の製品、特徴ある県産品が望ましいとの印象でありました。また、進出にあたっては、現地の日系企業などパートナーの確保が重要であるとの意見でありました。

さらに、日系人の香川県への人材受け入れ、雇用については、ブラジルでも、現在、労働者の確保が難しいため、単なる労働者雇用ではなく、高度人材の養成、確保に向けた取組みが重要であるとのアドバイスを受けました。

（教育、文化について）

日伯の文化団体、日本語学校を訪問し、施設見学を行うとともに、日本文化の普及についての意見交換を行いました。日本語教育や日本文化の学習体験を通して、日本や日本人に対する理解を深め、日本文化の普及を図っており、日本とブラジルの交流と親善に大きく貢献しております。

特に、日本語学校においては、本県が実施するブラジルの青少年受入れの取組みについて、人材育成の観点から高く評価され、大変感謝されました。

（今後の施策について）

将来に向け、香川県とブラジルとの交流を活性化、拡大するため、現在実施しているブラジルからの研修員、青少年の受け入れや、県内大学生等のブラジル派遣を継続、拡大するとともに、本県の人口減少、少子高齢化に対応し、本県へのブラジル人留学生など人材確保に向けた取組みを推進することが必要であると思います。

また、ブラジルとの交流を拡大するためには、県内在住のブラジル人との多文化共生事業の推進も重要であります。

さらに、瀬戸内観光のPR、県産品の販路拡大、県内企業のブラジル進出に向け、日本の魅力を広く伝える国際情報発信拠点「ジャパン・ハウス サンパウロ」への出展やJETROとの関係強化を図ることも必要であると思います。